

# 陳 述 書

平成28年8月2日

---

## 1 経歴等

私は昭和3年に奄美大島で生まれました。昭和23年に沖縄の美里村で金城真光と結婚し、翌24年に那覇市内に引っ越して暮らし始め、ここで専業主婦として8人の子供たちを育ててきました。

昭和42年、那覇市の立法院前で「教公二法阻止闘争事件」が起きました。沖縄の日教組は、1年前からストライキをはじめ、学校では自習が続いていました。私は、1時間目から子供たちに自習をさせる先生方に納得できず、「子供を守る父母の会」を立ち上げ、その事務局長として、日教組に反対する運動を始めました。これが最初の市民運動でした。

その後、日教組による沖縄の祖国復帰反対運動に対抗する形で復帰推進運動に合流し、昭和57年には「沖縄婦人平和懇話会」を組織するなど、多くの保守系の市民活動に関わってきました。その他、昭和47年には、「はなぞの保育園」を設立し、初代園長を4年間務めました。現在は3年前からネットTVチャンネル桜の沖縄支局で水曜と金曜の番組キャスターを務めています。

## 2 本件孔子廟の政教分離問題を取りあげた経緯

広大な久米郵便局の跡地にチャイナタウンができるという噂が流れていたことで心配していたところ、週刊新潮に、国からの一括交付金を使って那覇市の玄関にあたる若狭緑地に巨大な「龍柱（りゅうちゅう）」が設置されると

いう記事を読んで衝撃を受けました。首里城の龍柱に模した4本爪の龍は、中国の冊封を受け、属国となった印だということでした。知り合いの議員に聞くと、若狭にある久米孔子廟が跡地の松山公園に移設され、そこでも龍柱2本が新設されるとのこと。しかも、この龍柱は5本爪だといいます。5本爪の龍は、中国古来、孔子の生地のほかは、皇帝だけに許されたものでした。今、石垣市の尖閣で日中間の緊張が高まっています。若狭緑地と孔子廟に建つ4本爪と5本爪の龍柱は中国共産党が虎視眈々と狙っている沖縄侵略の象徴のように思えました。

孔子廟は孔子の御霊（みたま）を祀る施設であり、多くの中国人が信仰を寄せる宗教施設です。台湾には日台交流の使節として過去5回ほど行っていますが、その都度、台北の孔子廟にお参りしました。孔子様は学問の神様とされ、孔子廟には合格祈願のため、多くの人々がお参りしていました。菅原道真公を祀る天満宮と同じです。

この裁判では「儒教は学問か宗教か」が争われていますが、私は儒教には学問と宗教の両面があると思っています。論語は学問ですが、釋奠祭礼（せきてんさいれい）は宗教儀式です。明倫堂は学問の施設ですが、孔子廟は宗教施設です。それが一般人の見方だと思います。

また、本件孔子廟は、久米三十六姓（クニンダンチュ）という中国渡来の一族からなる久米崇聖会の持ち物です。久米崇聖会は、公益性のない私的な団体にすぎません。市民の公園に私的な団体の宗教施設があるということには違和感があります。しかも、那覇市は公園の使用料を無償とする特別の便宜を図っています。中国の宗教に沖縄人の心と精神が侵略されていくように思えました。同時に、日本国憲法の政教分離という原則に違反していると直感しました。

同じ思いを持つ有志の方々とともに、「すみよい那覇市をつくる会」を

立ち上げ、街頭での署名運動等をはじめました。特に会の規約はありませんが、200名以上の那覇市民が会員です。しかしながら、那覇市は全く改める気配がありませんでした。そこで弁護士さんたちをお願いして住民訴訟という方法を通じて那覇市による憲法違反を糺そうと考えました。

### 3 本件孔子廟に感じる違和感

本件孔子廟に感じる違和感の出発点は、私的な宗教施設が公共の場で特権的に扱われていることにあります。入り口の「至聖門（しせいもん）」は、年に1度しか開かれませんが、釋奠祭禮のときに孔子の霊を迎えるためにだけ開かれるのです。芝生しかない中庭の中央を通る「御路（おんみち）」は、孔子の霊が通るために敷かれた石の道です。釋奠祭禮のときは赤い絨毯が敷かれます。「大成殿（たいせいでん）」は孔子廟の本体で、屋根を白っぽい2本の石柱が支えています。これが5本爪の龍柱で、旧大成殿にはなかったものです。普段は正面の賽銭箱の前を中国系と思われる信者たちが座り込み、手を合わせて熱心にお祈りしている姿を見かけます。大成殿の奥には、「啓聖祠（けいせいし）」の扉があります。孔子の父祖が祀られているらしいのですが、久米三十六姓の拝所（うがんじょ）であり、一般の人は入ることができません。

長く那覇市に暮らしてきた私たち住民にとって、本件孔子廟は、中国渡来の久米三十六姓の一族が承継してきた中国の宗教儀式を誇示するための施設であり、中国の直轄地であることを示しているように思えます。久米崇聖会は、沖縄と中国の架け橋だと言っていますが、全くの時代錯誤です。私たちが違和感を抱いている理由は、そこにあります。

### 4 本件孔子廟での釋奠祭禮

本件孔子廟が宗教施設だと確信したのは、平成25年9月に行われた釋奠祭禮（せきてんさいれい）の儀式の動画をパソコンの画面でみたときでした。

それは久米崇聖会が自らのホームページにアップしている動画でした。去年の9月には本件孔子廟で行われた実際の釋奠祭禮を間近で見学し、最初から最後までみました。改めて、これを宗教といわずして何を宗教というのか、と思いました。

厳かな雰囲気と音楽のなかで、黒い礼服を着た久米崇聖会の人たちが、奥の「啓聖祠」の扉を開いて出てくると、「至聖門」が開いて孔子の霊をお迎えします。お線香をあげ、蠟燭をともし、供物をささげ、孔子の像の前で「三跪九叩頭の礼（さんききゅうこうとうのれい）」という独特の礼を行います。最後は、執事が提灯をもって孔子の霊をお送りし、「至聖門」を閉め、提灯の灯を消して終わります。

## 5 遷座御願

久米崇聖会のホームページには、若狭の旧孔子廟を移設する際になされた儀式の動画がアップされています。この動画をみて驚きました。その儀式は遷座御願（せんざうがん）というそうですが、あろうことか、旧孔子廟の前でユタが久米崇聖会のお歴々と並んで座り、孔子像と神位の前で呪文めいた言葉をつぶやきながら拝みをしていたのです。

ユタとは民間の霊媒師で、そのほとんどが女性です。琉球の時代、政府お抱えの霊媒師はノロといい、官職を持たない民間の霊媒師をユタといいました。ノロは世襲であったため神霊と交感する能力の低い人もいたため、次第に権威がなくなり、逆に、神霊と交感する能力に優れた一部のユタが人々の信奉を集めるようになりました。今も多くの沖縄の人々がユタ通いをし、ユタの拝みに応じて降りてくる神霊の御告げを求めます。

ユタが拝みをする遷座御願の動画をみて、久米崇聖会が、本件孔子廟を単なる学問の施設ではなく、彼らが崇拝する神霊が宿る宗教施設だとみていることが、より一層明らかになったと思います。

## 6 ハーリーやエイサーとの違い

久米崇聖会は、釋奠祭礼は沖縄の習俗であり、その起源に宗教的要素があっても、爬竜（ハーリー）やエイサーと同じように、そこに観光等の趣旨から行政が関与しても問題がないといっています。

これはとんでもない詭弁です。

久米崇聖会による釋奠祭礼は、一般の沖縄県民にとって全くなじみのないものであり、誰もが知っているエイサーやハーリーのような世俗化した沖縄の習俗と同一には語れません。

爬竜（ハーリー）は、旧暦の5月4日（ユッカヌヒー）に行われる爬竜船で競漕する行事です。長らく途絶えていましたが、1975年の沖縄海洋博を機会に復活し、その後は沖縄を代表する行事になりました。最大の那覇ハーリーは、新暦の5月3日から5日までの3日間で行われ、中学生による学校対抗戦などが行われます。これはリクレーションであって、神様に関する宗教性は全く感じられません。

太鼓を持って踊るエイサーもまた、沖縄の伝統芸能です。神様に関する宗教性はありません。見る方も踊る方も楽しみでやっていることで、近年では、結婚式や運動会、文化祭、歓迎会、老人ホームの慰問等での出し物としても行われているようです。

宗教とは、特定の神様や御霊に対し、お線香を立てたり、蠟燭を灯したり、お供えものを捧げたりして、お祈りするものだと思います。ハーリーにもエイサーにも祈願するものはありません。しかし、釋奠祭礼は、孔子の御霊を祀り、神として崇め、厳かな雰囲気の中かで、お線香を立て、蠟燭を灯し、お供えものを捧げて祈ります。それは宗教儀式そのものです。

大多数の沖縄県民にとって中国の道教と儒教の区別はありません。本件孔子廟は、今も若狭にある天尊廟（てんそんびょう）や天妃宮（てんぴぐう）

などと同じく、久米三十六姓が沖縄にもってきた中国の宗教施設であって、一般の沖縄県民にはなじみの薄いものです。

## 7 まとめ

久米崇聖会が所有している本件孔子廟は、久米三十六世の宗教儀式である釋奠祭禮を行うための宗教施設です。それを市民の公園である松山公園に設置し、無償で使用させているのは、特定の一族からなる私的な団体である久米崇聖会に特段の便宜を与え、その宗教的活動を容易にするものだと思います。この思いは、私の思いであるとともに、「すみよい那覇市をつくる会」の署名運動に協力して頂いた多くの那覇市民、多くの沖縄県民、そして多くの日本国民の思いです。

以上